

1枚の写真が国家を動かすこともある。フォトジャーナリズム

DAYS

J A P A N

「トランプ時代 生き抜く言葉

膨大な難民たちの

Vol.14 No.3
2017 MAR

ケニア 女性の避難村

3

毎月20日発売
定価843円
(本体価格781円+税8%)

天本直
想田
田中優
丹下

西谷修(立教大)
森達也(トキョ)
綿井健陽(トキョ)
広河隆一



福島から見える未来 原発空撮

ニューヨークの秘密の島

森の妖精モモンガ / 「ペンギン」という名の家族

人々の意
止める

6年目の福島

2011年12月、野田佳彦首相が「事故収束」宣言をしてから5年経った。
13年9月、安倍首相が五輪誘致演説で、事故は「アンダーコントロール」と宣言してから3年半。

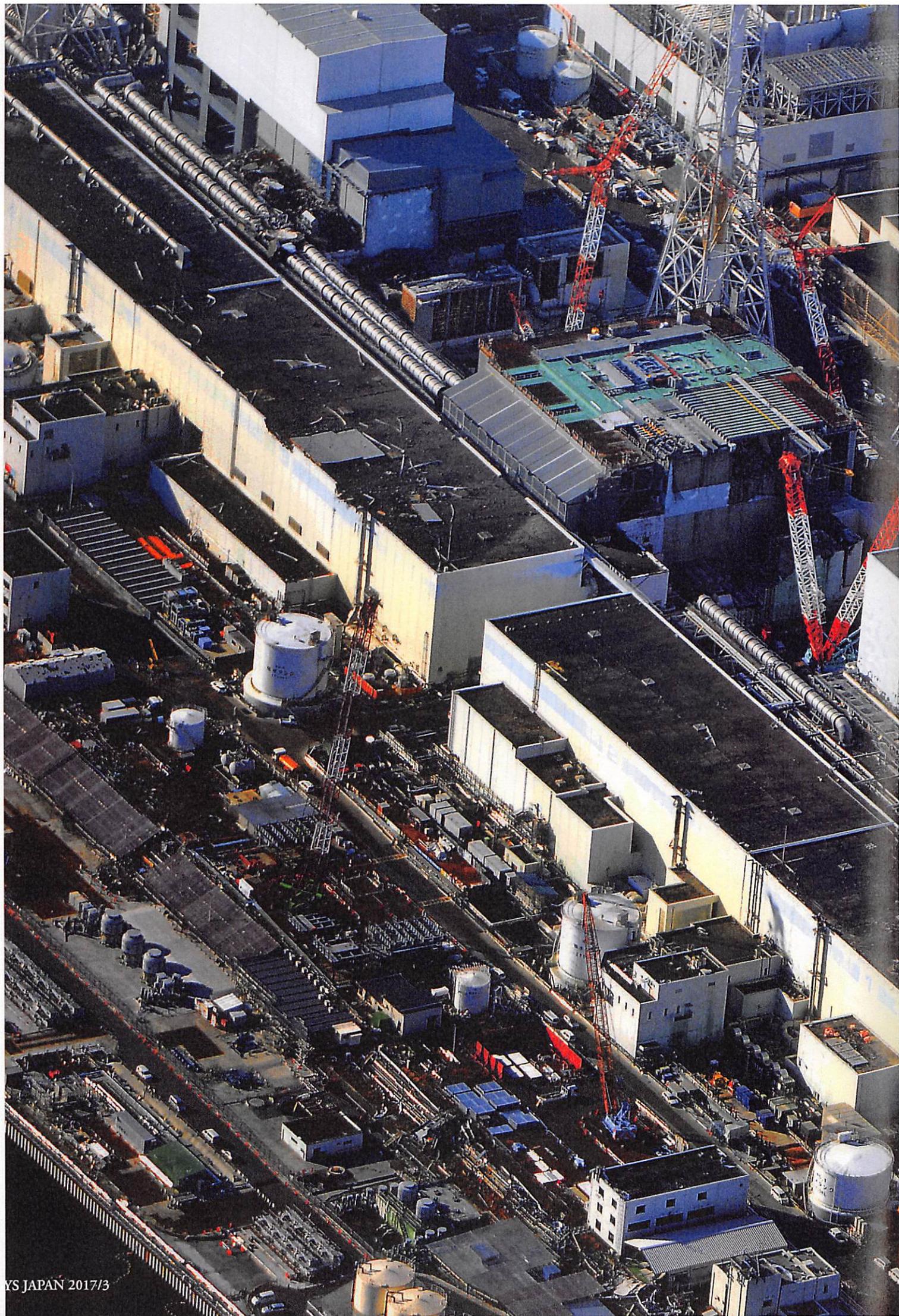
しかし凍土壁も機能せず、地下水の構内流入も海洋汚染も続く。メルトダウンした
核燃料の取り出しも見通しが立たず、一方で子どもの甲状腺がんも多発し続けている。

それなのに、強引な安全宣言で避難者への支援は打ち切れ、
世界が危険とみなす地域への帰還が迫られる。

写真・文 広河隆一

Photo & Text by Ryuichi HIROKAWA

画面右から1、2、3、4号機と並ぶ。
2号機は内部のデブリ（溶けた核
燃料）と思われるものの撮影に成
功したが、そのあたりの放射能は
毎時530シーベルトと推計され
る。しかも压力容器には大きい穴
が確認された。6年かかってよう
やく内部のごく一部を覗くことが
できるようになった状態だ。福島
第一原発。2017年1月25日





浪江町では1万8493人が避難生活（2016年末現在）をしているが3月末に避難指示が解除される。しかし町のすぐそばまで汚染廃棄物の仮置き場が続く。住民説明会では、「廃炉作業中にまた事故が起きたらどうするのか」とか、水を利用することになる大柿ダムの汚泥はキロ当たり20万ベクレル前後との県の報告に、「そんな危険なところに子どもを帰せというのか」という怒号が響いたという。福島県浪江町上空。2017年1月25日

事故6年目が1か月半後に迫った1月25日、私は毎年定期的におこなっている福島第一原発の空撮をした。1号機の覆いが外され、瓦礫の撤去が始まっていた。3号機も天井遮蔽のための鉄板工事がおこなわれ、様相が変わっていた。しかし、1〜3号機のプール内には瓦礫が散乱し、核燃料は1573体もあり、いくつかは変形している。1号機内の瓦礫撤去だけで2年間かかると見積もられているが、これらを安全に取り出して移した後、溶けた核燃料（デブリ）の撤去には、いつ取りかかれるか見当もつかない。

構内を埋める処理水は、およそ90万トンが1000基のタンクに蓄えられ、地下にはさらに推定7万トンもの高濃度汚染水が溜まり、凍土遮水壁も凍結が始まってから半年たっても、地下水の建屋地下への流入を止める役目を果たしていない。何度も高濃度ストロンチウムの汚染水漏れが報告されてきた旧式タンク（ボルト締め付け型）は取り壊され、溶接型に替えられる途中だったが、敷地内にはもう新規タンクの設置場所はない。

経産省が打ち出した廃炉と補償の推定経費は2兆5000億円まで膨れ上がっている。チェルノブイリ原発でも核燃料撤去は、30年たっても手が付けられていない。事故炉を覆う石棺の耐久年数の30年が過ぎ、昨年、その上に新しいドームがかせられたが、その耐久年数は1000年。この期間に作業が終わる保証はない。

国や自治体は、オリンピックを控えて、すべて「安全になった」「コントロールできている」というキャンペーンをおこなっている。

廃炉作業の見通しがかたず、事故の責任をだれもとらないまま、住民の帰還が進められる。現在の状態が「安定している」と宣伝するため、昨年11月18日、東電は18歳未満の福島高校の生徒たちの構内見学を許可したが、その直後の22日に震度5弱の地震が襲った。1号機のすぐ横には亀裂が入った排気塔があり、これが1号機建屋の上に倒れば、恐ろしい惨事が起こるところだった。福島県では「安全」のイメージ作りに子どもが参加するケースが多いが、それを許可した人間や、許可するように圧力をかけた人物の責任が重く問われる。

高濃度汚染地への住民帰還もあまりに拙速だ。せめて完全に安全になったと確認できてからも、まず大人が住んで、それから最低5〜10年の間、完全に安全な状態が確認できた後になってから、妊婦や子どもが住み始めるという2段階が必要だ。大人に安全な環境が子どもや妊婦に安全とは限らないのだから。

国際的に危険とされている場所を「安全」と言い募ったり、「復興」や「オリンピック前の問題解決」などのスケジュールが絶えず優先されて、子どもたちや妊婦の配慮が無視される今のやり方では、人々の健康が犠牲にされていると言われ



富岡町の一部は帰還困難区域とされ、ここは除染廃棄物の広大な仮置き場になっている。福島県富岡町。2017年1月25日



汚染物を入れたフレコンバックと並ぶ仮置き場が、富岡町に広がっている。富岡町は事故で7040世帯の住民が避難したが、街に戻る希望を出しているのは回答数3257世帯のうち16パーセントに過ぎない(2016年10月25日「富岡町民意向調査調査結果(速報版)」による)。福島県富岡町上空。2017年1月25日



浪江町請戸(うけど)の慰霊碑。周囲に残されていた多くの漁船や住宅はほとんどすべて撤去され、広大な広場になった。この一帯は2011年3月11日に津波で多くの犠牲者を出した地区で、消防隊員は暗くなって救助をいったん打ち切り、瓦礫の間から助けを求める声に、必ず翌早朝に戻ってくるから待っていてくれと呼びかけた。しかし翌朝には全住民の避難が指示され、救援はなされなかった。福島県浪江町。2017年1月25日



学校の校庭にあったジャム。体育館では、入学式されたままだった。福島
2017年1月30日



取り壊された船や家屋が処理されている浪江町請戸の海岸近くの現場。このあたりは全域が仮置き場になる予定で工事が進んでいる。福島県浪江町請戸。2017年1月30日



このあたりの商店街は事故以来、手が付けられないままになっている。ボロボロになったカーテンが、6年の歳月を思わせる。福島県双葉町。2017年1月30日